

日本をキリストへ 協力

「日本をキリストへ」
伝道団体連絡協議会

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1
TEL 03-3291-5035

聖霊による「降誕」

伝道団体連絡協議会副会長 原 登

「イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリアはヨセフと婚約していたがまだ一緒にならない前に、聖霊によって身重になった。」マタイ一・一八（口語訳）

マタイによる福音書の著者は、そこで「王」としてのイエス・キリストを記すと共に、この王であるお方が、神であったと証しいたします。その根拠になる言葉は、この一章一八節であります。「聖霊によって身重になった」。この聖霊によるというみ言葉こそ、マタイの著者が、キリスト降誕を理解した鍵になるみ言葉であります。この句は次の二〇節に主の使いの言葉としても記されてあります。

イエス・キリストは、確かにアブラハム・ダビデの家系を持つヨセフを父としました。しかしヨセフはあくまでも義理の父であって、実の父ではない。主は、処女マリヤを母体として生まれたまいました。そしてマリヤが身重になったのは、通常の結婚によるものではなく、「聖霊による」ものであると証しされています。

したがってイエスの父は、ヨセフではなく神であると告白されているのがあります。

ΕΚ ΤΗΣ ΔΙΑΤΟΗΣ

「*γεννη*」とありますが、「*γεν*」とは源、原因、起源の意味を持ちます。イエス、キリストのご降誕の系図は、「聖霊」であると告白されているのであります。

ユダヤ人は、特に神の霊と、創造の業を関連させて考えました。神が創造の業をされたのは、神の霊を通してであります。（創世記一・一、二。詩篇三三・六）

神の霊は、世界の創造の力であり生命の賦与者であります。ご降誕は、まことにイエスにおいて、生命を与え、創造する神の力が世に来たということであり、イエスにおいて、神ご自身の生命と力が、この世に入ってきたのであります。

「マタイが語ろうとする中心は、神の霊が、イエスの誕生において、天地創造以来、最も力強く働いた年であった。」（ウイリアム・パークレー）

この神の霊、聖霊が具体的に、一つの集団に降ったのが、あのペンテコステの出来事であります。

今は、聖霊の働きについて様々な現象が論じられているようであり、何が正しく、また健全であるかについては、論評を避けたいと思いますが、正しい聖書観に立脚すべきであることは申すまでもありません。

第11回伝団協研修会開催

専門分野 での働きの 使命は大きい

今年（一九九五年）の研修会も恵みシャレー軽井沢でもたれました。今回は講師に米沢の恵泉教会牧師、千田次郎師を迎え、地方で教会伝道に携わっておられる先生から、地方教会と伝道団体といった角度から二回の講演をいただきました。

先生のクリスチャンとしての歩みはラジオや文書という伝道団体の働きによって始められ、牧師になってとかく初めにとりかかれる伝道の業としてトラクト配布など文書に負うところが大きかったこと、さらに地域の教会と一緒に伝道を拡大していくとき総動員伝道など伝道団体と共に活動させていただいたと振り返られ、伝道団体抜きには伝道を語れないと証ししてくださいました。

伝道団体は、ヨルダン川を渡るとき、契約の箱を担ぐ人々が先頭に立って川に足を踏み入れたように、伝道の先頭に立って進んでほしい。さらにその人々が、全集団が渡り終わるまで川の中にいたように、伝道の中心において教会の働きを支えてほしいと語られました。

伝道団体に献身して、主と教会とに仕えていくうとしている私たちに大きな励ましをくださいました。

また、今回は幾つかのジャンルに分けられる伝道団体の中からふたつのグループ（文書伝道団体と社会的な働きに取り組んでいる団体）に発題し

ていただきました。

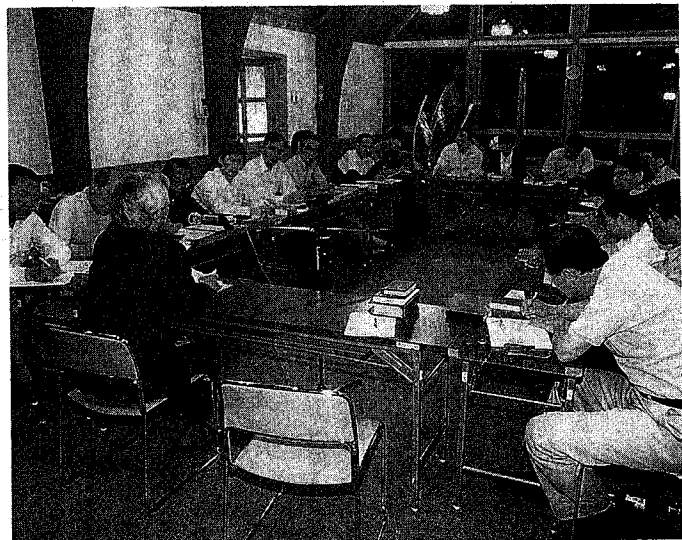
「壁を突き破る文書伝道」というテーマのもとにCLC、いのちのこぼれ社、新生宣教団の三つの団体から意見を述べていただきました。その内容をまとめてみました。

まずはCLCから

「壁を突き破る文書伝道」というテーマを与えられて、本当に突き破ることができののだろうか、突き破ろうとしているのだろうかと挑戦をいただきました。一千万救霊の幻をもっておられる山口の松田先生から、人間のプランとして考えるとむつかしいが、神に委ねていくと実現可能であると励まされました。古いものから新しいものへの壁、クリスチャン人口一％という壁、この壁を突き破ることができののだろうかと祈っていると、二匹の魚と五つのパンの記事を思い越し、突き破ることができると思うようになりました。

そのために

文書伝道における基本の確認が必要だとしめされています。それは使命とビジョンの確認です。営業成績ばかりに目を奪われやすくなっています。が、使命とビジョンをいつも思い起こして伝道に励みたいと思います。信仰、献身、交わり、清さが大切なポイントであると自覚しています。文書が持っている威力を再確信して伝道に励みたいと



思いますし、教会やクリスチャンが総動員して文書を活用していただきたいと思えます。一週間に何冊の本を読んでいますかと牧師にアンケートを取ったことがあります。あまり本を買ってくださらない現実があります。書店の経営もむつかしいのです。トラクトなどの伝道文書はあまり売れないので書店に置けないのです。約三〇％しか伝道文書を置いていないのが現状です。書店の経営不振で閉店に追い込まれる地方もあります。

CLCは人々のニーズに答え得る文書、福音的な文書、時期を得た文書を出版していきたいと思っています。

次いでいのちのこぼれ社から

創立から四五年、「主に仕え、教会に仕える文書伝道」に携わってきました。伝道、宣教という

使命達成のためによい伝道文書を世に送り出すことに努力してきました。またもう一つの使命は教会の建て上げで、クリスチャンの霊的励ましと訓練のための文書を発行してきました。

経営がなりたたねばなりません、福音のためという確信を明確にして、内なる壁を突き破って伝道に励まねばならないと感じています。これらのことを考え、未信者の人々に届く伝道文書の開発、執筆者の発掘、教会の協力をいただく書店の経営（新潟方式と呼んでいる）に取り組みたいと願っています。

最後に新生宣教団から

「全世界に出て行ってすべての人に福音を」という理念のもとに働きを進めてまいりました。一九八五年エホバの証人の印刷局に行ったことがあります。一台三億円もする印刷機が五台あって、動いているのを見て挑戦を感じました。今年、鳩山に印刷所を移転し、新しい印刷機を据えて活動を始めました。現在七億の負債を抱えています。中国のリバイバルのために、また戦後の償いのためにも聖書を届けよう、とがんばっています。そのことよって中国のリバイバルの火が日本に飛び火して、日本にもリバイバルが起こるのではないかと期待しています。

「恵みの雨」と大型トラクトにしばって伝道のための文書を印刷していきます。一般の人々が理解できる用語を用いて文書を書く必要があります。執筆者の養成、裾野を広げる努力をしたいと考えています。

もうひとつの大きなテーマは「社会に対する責任と伝道」です。これに関して三つの団体から発

言していただきました。

小さないのちを守る会から

教会は霊的救いを強調するあまり地上的なことを怠りやすいと思います。もちろん社会的福音となるとまったく違ってくると思いますが、一九七四年のローザンヌ誓約にもりこまれて「キリスト者の社会的責任」も大切なことです。これに対する反応は、逃避か参加、遊離か対決なのですが、「よいサマリヤ人」のように取り組んでほしいと思います。使命とは神からの委託に対する私たちの応答だと思えます。今、マスコミや社会は、社会問題に対する教会の出方に注目しているのです。今こそ教会の出番だと思えます。

ディアコニア・センターから

社会問題に対するクリスチャンとしての積極的

な反応として、宣教とディアコニアに取り組んでいます。自己中心な人々がストレスやノイローゼになり、逃避として酒、麻薬、またギャンブル、拒食症、性に走っています。そこで喜びの輪をひろげようというキャッチフレーズで呼び掛けています。すべてのクリスチャンはカウンセラーの資質をもっています。そこで配慮の輪を広げようと呼び掛け、疲れている人が多いので、やすらぎの場を広げようと呼び掛けています。

福音主義医療関係者協議会から

交わりを中心にして、聖書の学びを深め、職場で証しをしていこうとしています。

これらの発言から

社会的な問題はなかなか教会で受け止めていただけな要素があるのですが、教会に直接益をもたらさないように思えても海外伝道に取り組むように、社会問題にも取り組んでくださるときっと多くの祝福を得ることができると思います。

中絶の問題なども、教会で扱われるとその経験をもって人が教会に来にくくなるし、来なくなってしまう恐れがあります、ということに触れないようにする必要があります。そこには解決がありませぬ。私たちは責めるためにこの課題を持ち出すのではなく、赦しのメッセージを携えて解決に向けて主の導きを求めようとしています。

専門分野で奉仕をしているお互いの使命は大きいと再確認いたしました。



地域教会と超教派伝道団体

⑦

キリスト者学生会総主事 片岡 伸光

一九九三年九月の伝団協研修会で、会員であるハーベスト・タイム・ミニストリーズの主幹者中川健一氏は、高度に発達した情報伝達メディアの時代の福音宣教という視点から、「地域教会とパラチャーチ」という発題をしてくれました。氏は当時すでに衛星放送が実用化され、民間団体が利用することができるようになっていくことを指摘した上で、地域教会も伝道団体もそのことをよく認識し対応した活動が求められていると語りました。また、キリスト教会が一致するならば、商業衛星の放送番組の一チャンネルを購入し、世界中に福音伝道放送を届けることができると夢も語ってくれたのです。

その講演を聞きながら、地域教会を取り巻く状況の変化に改めて気づかされました。ことをキリスト教関係に限っても、古くからある本などの文書をはじめとし、ラジオ、テレビ、ダイレクトメール、またこのところ一気に普及しだしているパソコン通信まで、あらゆる情報や集会案内が信者のもとに届けられます。それらにまったく触れないようにすることは不可能と思えます。

そのことを一地域教会からみるならば、信者が必ずしも教会で推奨していないメッセージや教えに触れていくことを意味しています。これは地域教会にとっては危機と言えます。教えに関して地

域教会の境界が非常に曖昧にされていく危険性ははらんでいるからです。交通手段が発達し、信者の分布している地域が驚くほど拡大した現代において、日常的に顔を合わせる事が減少傾向にある地域教会にとっては驚異ですらあります。伝道団体は地域教会のそのような感覚を理解しなければなりません。

しかしそれは地域教会にとって、積極的にとれば、成長する機会であるとも言えます。地域教会のひろがりを受入れて、そのことを根底において教会形成をしていくことができるからです。どうしても情報が目に入り届けられるとしたら、それを吟味しつつ用いるとよいのではないのでしょうか。

自分の教会と異なる強調をしている場合は、それを取り上げ、聖書から共に学び、また歴史的に自派の教会がどのように受け止めてきたかを十分な理由と共に学ぶのです。歴史的な教会は、異なる教えと対話・対決して鍛えられてきたのです。

そのことは、信徒がすでに触れているのに、何も言及しないよりは、はるかによい結果を生み出すことと思えます。

そして何よりも大切なことは、福音のメッセージを土台として、主の宣教のビジョンのひろがり地域教会においても伝道団体においても共に受け止め、その上でそれぞれの分担をしっかりと担

うことです。それこそがメディアの発達を上回るキリストにあるものの真の対応です。強調点や特徴を生かし合い、自分の団体の発展のみでなく、主のみからだなる教会の発展のために働く必要があります。協力できるところは積極的に協力して、この国に福音を満たすわざを推進することです。指導者から、ひとりひとりの構成員まで、そのビジョンにおいて一致する働きを主が望んでおられると信じます。

これまで、クリスチャン新聞の論説『パラチャーチ考』を発端として話題となったテーマを、「地域教会と超教派伝道団体」という題で、両方の視点を取り入れながら、いささか長きにわたり論じてきました。当時取り上げられていた論点を取上げ、視点を提供するという初期の目的を一応達成したと思われまので、ひとまず筆をおかせていただきたいと思います。本題は今なお非常にデリケートな一面をもっています。一気に文章化せず、一つずつ連載したのも、時間をかけて個別に検討することが必要と思われたからです。これからもひとつひとつ取り上げ、しかる後に全体を見るというアプローチが必要であると思えます。聖書からこの主題に関して学び、教会の歴史における経緯をみる必要があると思われましたが、時をあらため、さらに相応しい器に期待したいと思います。福音の前進を期待しつつ。△終わり▽

発行日 一九九五年十二月二十日
発行者 羽 鳥 明
編集者 鈴 木 繁